

す)と密接な関係があるので、大雨予報にはこの地域の気圧変動に着目することが必要である。

今後さらに検討を要するが、一応予報則として「50°N, 180°E付近で半旬平均気圧が8 mb以上になったら大雨の可能性を検討する必要がある、とくにその正偏差域の逆行が示されている場合にはその2半旬後(すなわち翌々半旬)に大雨または多雨が発現する」と考えてよいようである。

ところで、前報告で明らかにしたように寒候期中部日本付近へ襲来する大寒波には高緯度リッジの発現が先行するが、とくに持続的な大寒波は、この緯度リッジの発現がアラスカ方面からのリッジの逆行に起因している場合が多い(1), (4), (5), (6)。

さらに今回明らかにしたように梅雨期の東海地方の大雨もまた日本のはるか北東方の高圧部の逆行に関連したものが多し。

したがって、寒候期にも梅雨期にも北東方の顕著高圧部(上層ではリッジ)の逆行が日本付近に異常天候をもたらしていることになる。

かくして、この種の逆行波の動態をより一般的に把握することは天候予想上きわめて重要であると考えられる。この点については次の機会に報告したい。

これらの問題について調査の機会を与えられ、また日頃ご指導ご討議をたまわる矢木予報課長はじめ予報課の皆様にご感謝の意を表する。

参考文献

- 1) Kato, H. 1962: Southward Propagation of Pressure Waves on the Hemispheric-scale, Journal of Met. Soc. of Japan. Series II, Vol. 40, No. 1, 51~62
- 2) 加藤久雄, 1963: 半旬平均気圧場の変動と天候——暖候期における気圧南北変動と天候——, 日本気象学会機関誌, 天気 Vol. 10, No. 3, 65~68
- 3) 気象庁, 1956~62(年別): 大雨予想資料(一部未刊)
- 4) 名古屋地方気象台, 1955: 昭和29年月末の寒気の検討, 昭和29年度全国予報検討会名古屋地方気象台資料
- 5) 加藤久雄, 1956: 1954年1月末の低温(特に偏西風帯の振動との関係), 東海地方気象研究会誌 10, No. 1
- 6) 加藤久雄, 1961: 1カ月予報の検討資料, その2. 寒候期における気温変動の機構とその予報法, 昭和35年度全国暖候期季節予報検討会名古屋地方気象台追加資料

気象界消息

1. 小林, 関口, 村松3氏, 渡米

気象研, 小林寿太郎, 気象庁高層課, 関口理郎, 高層気象台, 村松久史の3氏は1月25日, オゾンゾンデの比較観測その他の業務のため, アメリカに向け出発した。

2. 大寒の寒さ

1月21日, 大寒の日, 日本海側の雪と太平洋側の晴の典型的な冬型の天気となって, 東京-2.8°C, 名古屋-4°C, 大阪0°Cと平年値より2.3度低い寒波におそわれた。

3. ブラジルの洪水

1月22日, リオデジャネイロからの報告では, 突然ふりだした大雨のために, ミナスゲレエ州の北東部にある, Jequitinhonha 川の峡谷地方に洪水が発生し, 60人以上の人命が失われたとのことである。

4. 千葉の初雪

東京では2度目, 千葉では初めての雪が1月25日朝, 間東一帯を白くそめた。御殿場の積雪は5cmであったが, 天城山脈では15cmとなった。この日は大島三原山の積雪は30cmとのことであった。

5. カシミールの地震

くわしいことは不明とのことであるが, 1月28日, カ

シミヤで有名なカシミール地方に大きな地震があったと報じられた。

6. 南アフリカのトルネード

ヨハネスブルグからの報道では1月28日, 南アフリカ, トランバル地方の東部の農村 Hendrina にトルネードがおそったとのこと。通信線が破壊され, 詳細不明とのこと。

7. 1月中の東京の雨量

今年1月の東京の降水量は128.2mmで, 1875年開設以来の新記録の多量に達した。今までの最高は1898年の126.9mmであった。

8. エトナ山の活動

伯爵夫人の装飾で, 気象界に知られているイタリアのエトナ山は2月2日, 中央火口が溶岩を噴火させ, 東斜面に約2マイルの流れを作ったとのこと。

9. カナダ東部の嵐

2月9日, カナダの東海岸に130 M. P. H(58m/s)の強風を伴う嵐が襲い, 家屋の屋根がふきとばされたとのこと。

10. フィリピンの洪水

2月17日, フィリピン, ミンダナオ島に洪水がおこり, タバオ地区の死者は34名にのぼったとのことである。